

## 教育現場、教育委員会、大学の連携による実践研究

－『教育の情報化』に関わる人材育成と普及啓蒙－

The research and practice in the cooperation with University, Schools and The board of education  
－ Training and Spread enlightenment concerned with “The Information - oriented Education” －

野中 陽一

Yoichi NONAKA

(附属教育実践総合センター) (広川町立津木中学校)

井口 章

Akira IGUCHI

桑木 義典

Yoshinori KUWAKI

(御坊市立藤田小学校)

嶋田 雅昭

Masaaki SHIMADA

(新宮市立三輪崎小学校)

宇田 智津

Chizu UDA

(貴志川町立西貴志小学校)

中井 章博

Akihiro NAKAI

(附属小学校)

雑賀 聡

Satoshi SAIKA

(湯浅町教育委員会) (附属教育実践総合センター)

豊田 充崇

Michitaka TOYODA

津守 泰子

Yasuko TSUMORI

(和歌山大学)

情報教育の分野において、様々なプロジェクトが行われているが教育現場にはなかなか普及されない。そこで実践研究の成果を普及するために、地域の教育現場、教育委員会等との連携による実践研究を通して、そこに関わったメンバーが研究成果を共有し、実践研究の力量を高めていく取り組みを進めた。

実践研究に参加したメンバーがそれぞれに実践の概要を紹介し、実践研究の在り方、実践研究の力量をどう高めていったのか、こうした活動を行うために大学と教育現場、あるいは教育委員会はどのように連携したら良いのか、現場への普及の状況等について記述した。

**キーワード：**地域連携、地域貢献、実践研究、教育の情報化、人材育成

### 1. はじめに

教育現場の改善に寄与できる学問的知見を見い出すために、フィールドワークやエスノメソドロジーといった研究方法によって実践を観察、記述するという教育実践研究が行われるようになってきた。しかしながら、実践を通して得られた学問的知見も、教育現場に普及し、教育改善につながらなければ意味がない。

情報教育の分野においては、短期間の間に様々な研究プロジェクトが行われ、その多くは実践的な研究であった。それらの研究成果は報告書や書籍、Web ページ等で公表され、数多くの研究会、研修会が開催されてきたにもかかわらず、教育現場における普及という観点から見ると、必ずしも成果があがっているとは言えない。

本研究では、実践研究の成果を普及するために、地域の教育現場、教育委員会等との連携による実践研究を通して、そこに関わったメンバーが研究成果を共有し、実践研究の力量を高めていく取り組みを進めた。こうした取り組みも既に各地で行われているが、ここでの実践研究は、大学の研究者、現場の教員、教育委

員会の指導主事等の協働によるものであり、内容は授業研究、実践事例の蓄積、研究成果の公開、研修会の企画・実施と多岐にわたっている。また、教育改善に寄与するための方策を模索しながら、それぞれの活動に協力して取り組み、実践を通して検証を試みた。

本論文は、実践研究に参加したメンバーがそれぞれに関わった実践を振り返り、実践の概要を紹介し、実践研究の在り方、参加したメンバーが実践研究の力量をどう高めていったのか、こうした活動を行うために大学と教育現場、あるいは教育委員会はどのように連携したら良いのか、現場への普及の状況等について記述した。

なお、この取り組みは文部科学省地域貢献特別支援事業、和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター情報教育研究プロジェクト、和歌山大学教育学部・和歌山県教育委員会連携協議会に位置づけて行ったものである。

### 2. 連携による実践研究

#### 2.1. きのくにデジタルコンテンツ活用コンソーシアムの取り組み

平成 14 年度には文部科学省の指定事業「デジタルコンテンツ活用高度化事業」を受けて、和歌山大学教育学部附属教育実践総合センターが中心となり、教育関連企業・教育委員会・学校から、研究者・教師が集まり、「きのくにデジタルコンテンツ活用コンソーシアム」を結成した。コンソーシアムへの参加校が広域に分布していたため、県内を 6 ブロックに分けてブロック単位で連絡調整を行いながら研究を進めた。子どもがよりわかりやすく興味を持てる授業づくりを目指して、インターネット上のデジタルコンテンツを活用する実践を行い、その成果を集約して 100 事例を教育情報ナショナルセンター（N I C E R）に登録した。また実践事例の Web 上での公開や成果発表会等により実践事例と研究成果を公開した。このようにデジタルコンテンツを活用した授業の実践事例の蓄積や研究・情報発信等において大きな成果をあげることができた。

この実践研究を通して、いくつかのリソースやノウハウを蓄積することができた。まず、メンバー各自が IT を活用した授業を企画、実践して、実践事例を共通の表現様式に整えて蓄積した。また、メーリングリスト等を活用したオンラインのコラボレーションを実現するための、実践者、研究者、レイアウト・Web 化担当者等の役割が明確になり、望ましいプロジェクトの体制を確立することができた。オンライン作業では、メーリングリストを使った連絡や調整、連携を行い、メールによるファイル交換の手段も確立できた。オンラインで実践記録を期限に従って集約し、共有資源や成果物を Web 化することにより誰でも見たりダウンロードできる形にして、共有化を図った。また、組織的な活動に関して、目標設定やスケジュール管理により、それぞれの具体案を持ちよって会議に参加する等の工夫を生み出し、少ない回数のオフライン会議の効率的な運用を図ることができた。

これらのリソースやノウハウは、継続して研究を進めていく上の大きな財産となった。（雑賀、井口）

## 2.2. 有田・日高ブロック研究会（和歌山 IT 授業研究会）の取り組み

平成 14 年度の「きのくにデジタルコンテンツ活用コンソーシアム」では、県内を 6 ブロックに分け、それぞれが定期的に研究会を開催し、実践を進めていった。

有田・日高ブロックでは、月 1 回の定例研究会（ブロック研）のほか、自主的に 5 回の授業研究会を開き、より効果的なデジタルコンテンツ活用のあり方を探ってきた。公開された「きのくにデジタルコンテンツ活用コンソーシアム」の 208 実践中、有田・日高ブロックは 64 実践をしめ、活発な活動を展開していた。ブロックでの活動の成果は単にプロジェクトへの貢献と

いう意味だけでなく、これらの取り組みによりメンバー自身がデジタルコンテンツ活用の有用性を認識し授業改善に向けて力量を向上させた点が大きかった。この点をふまえ、有田・日高ブロックでは研究会を存続させ、次年度も自主的な研究を継続して行うことにした。

取り組みの中で、解りやすい授業づくり・意欲的に取り組める授業づくりのために、デジタルコンテンツを活用して効果をあげる方法を普及していくことや、多くの教員が教材あるいは授業展開の素材のひとつとしてデジタルコンテンツを活用できるように啓蒙していく必要性を痛感し、「Web ページによる活用事例や指導案、有用なコンテンツの情報発信」や「授業研究会の開催」に取り組んできた。しかし、それだけでは広く普及するには充分ではなく、特にインターネットを積極的に利用していない教員への普及には、書籍等の活字による啓蒙が必要ではないかと考えるようになった。そこで平成 15 年度は、地域貢献特別支援事業の一つとして、『啓蒙書』の制作に取り組むことにした。

7～8 月の研究会では「コンピュータを苦手とする教師がデジタルコンテンツを活用して授業展開して行くにはどのようにしていけばよいか」「コンピュータに堪能でなくてもデジタルコンテンツを活用した授業展開が出来るようにするには何が必要か」等について活発に討論し、現場の先生方に「こんな手引き書がほしかった！」と言わせるようなものを作ろうと、知恵を絞った。できるだけ敷居の低い誰にでも理解できるもの、専門用語を使わない平易な解説を付け加える、学習活動の流れをイラストで表現する、視覚的に理解できるようにする等の意見がだされた。また機器の接続については最初に当面する壁であると想定できることから、できる限り丁寧でやさしい解説を入れることにした。

このように教室で実際に取り組む教師が抱くであろう不安を払拭・軽減できるように項目を設定し、分担して執筆していった。また授業案については、既に開発した授業展開を再検討して、この本を読んだ教師が直ぐに活用できる 30 事例をまとめた。こうして 1 月末に、啓蒙書『やればできるよ IT 活用－子ども達の目が輝く IT 授業を－（高陵社書店、野中陽一・井口章編著、2004）』を発刊することができた。

啓蒙書発刊に伴い、これまでの有田日高ブロック研究会は、もとのメンバーを中心に「和歌山 IT 授業研究会」として再編成することになった。そして、3 月半ばに結成のための初会合を開いた。

平成 16 年度は、「和歌山 IT 授業研究会」の取り組みのひとつとして、松下教育研究財団の研究助成を受け、昨年度の取り組みを継続・発展させ、『「やればできるよ IT 活用」授業実践イラスト化計画』を進めて

いくこととなった。これは授業実践をイラスト表現し、焦点化して伝えようという取り組みである。活用の意図や目的別に類型化して実践事例を紹介し、コンテンツの活用場面や授業の流れをイラストの描き手とのコラボレーションでイラスト化してわかりやすく表現する。イラスト化することにより、

- 実践者のねらいや授業の流れのポイントが明確化・焦点化される。
- 実践者のひとりよがりの表現が、イラストの描き手とのコラボレーションにより他の人にわかりやすい表現に修正される。
- ユーモアのあるイラスト表現を入れることで、初心者にとって温かく親しみやすいものにできる。

等の効用が期待できる。授業実践者とイラストの描き手がコラボレーションする形でイラスト表現化するプロセスをうまく使い研究を深めたいと考えている。この取り組みを核とし、今後とも授業実践を深め、授業での IT 活用を普及・啓蒙していきたいと考えている。(桑木・雑賀)

### 2.3. 新宮市教育研究会・視聴覚情報部会の取り組み

視聴覚情報部会は新宮市教育研究会の一部会であり、「コンピュータ等の情報機器の教育における効果的な活用の実践的研究」を目的に活動を行う組織である。平成 15 年度はメンバー 15 名、年間 12 万円の予算で活動した。当部会の具体的な活動の概要と地域貢献特別支援事業による支援との関わり、その活動の意味付けについて述べることにする。

部会の活動の内、①授業研究会、②情報モラル研修会、③東牟婁情報教育研究会において地域貢献特別支援事業の支援を受けた。広い見識に基づく質の高い情報を得られること、研究機関との関わり・人とのつながりが持てること、支援に関わる費用については必要ないこと等が、支援を要請した理由である。

#### ①授業研究会 7月8日(火)

3 年生理科「昆虫のすみかと食べ物」林育史

デジタルコンテンツを活用した授業である。事前に指導案検討を協同で行い、児童の活動の場面の意味付け、関連するデジタルコンテンツの紹介などの支援を受けた。これらの支援は実際の授業に生かすことができ、授業および研究協議の内容が質的に向上した。授業研究会を協同で開催することにより、授業の計画、実施、評価のすべての過程において連携を実現することができた。

#### ②情報モラル研修会 11月4日(火)

「教育における情報モラル指導とセキュリティ・著

作権問題対策 ―学校でいかに守り、指導していくか―

講師 和歌山大学教育学部附属

教育実践総合センター 講師 豊田充崇

- ・情報モラルの育成について
- ・和歌山県美里町立美里中学校の取り組みより
- ・体験コーナー
  - (1)「情報モラル教材」「情報モラル授業実践事例」
  - (2)「著作権フリー教育用素材」について
  - (3)「高機能なフリーソフトウェア」の活用



部会内から情報モラルについて研修したいという希望があり、豊田氏に講師を依頼して研修会を持った。こうした研修会では、講師の情報教育に関する見識の広さや専門性が必要であり、地元で講師を探すことは難しい。豊田氏は自らの実践経験に基づき、体験コーナーを設けるなど、現場でのニーズや効果的な研修のあり方を考慮した研修会を企画・実施してくれた。この研修会は東牟婁地方全域に参加を呼びかけ、部会以外の参加者も見られた。

#### ③東牟婁情報教育研究会 2月27日(金)

東牟婁地方全体の情報教育に関する研究会である。ポスターセッションでは小中学校における実践および環境整備について情報交換を行い、講演では山中氏に広い視野から東牟婁地方の課題について示唆を受けた。最後に地域貢献特別支援事業の支援として豊田氏が講評をし、閉会した。発表者や内容を見ると、研究会全体を通して直接あるいは間接的に実践センターと関係があることを改めて感じる。また、この研究会には豊田氏以外にも実践センター職員・学生など数名が参加し、互いに交流し、つながりを持つことができた。



ポスターセッション	王子小学校 馬場敦義 氏 「王子小学校ネットデイ ～こうしてネットデイは行われた！」 丹鶴小学校 西川秀大 氏 「実践！やればできるよデジタルコンテンツ活用」 三輪崎小学校 林育史 氏 「C G Iで変わる！学校ホームページの活性化」 光洋中学校 松本潤 氏 「卒業記念CDの製作」
講演	「どうなる！どうする？東牟婁の情報教育」 ～日本全国・世界各地での活動から見えてきたこと～ 鳴門教育大学大学院 総合学習開発コース 2003年 N E C C日本代表プレゼンター 熊野川小学校 教諭 山中昭岳 氏
講評	和歌山大学教育学部 附属教育実践総合センター講師 豊田充崇 氏

最後に、新宮・東牟婁地方は地理的に不便なところであるが、地域貢献特別支援事業の支援を受けることにより、地理的に恵まれない部分がある程度カバーすることができた。地方の研究組織としては、今後も実践センター等の研究機関との連携を有効に生かし、自分達の研究の質を向上させていきたいと考えている。(嶋田)

### 3. 実践研究の成果の普及

#### 3.1. 「教育の情報化」研修会

1月24日に行われた「教育の情報化」研修会で、4つのブースに分かれてポスターセッション形式で模擬授業を行った。低学年・中学年・高学年・中学校の4つのブースに分かれ、参加者を生徒に見たてて模擬授業を行った。40分の間にデジタルコンテンツを活用した授業をいくつか行い、参加者は自由にいろいろなところを見ることができるといった形態である。

目の前に子どもがいないということで、授業者には少し不安があったようだが、実際には、参加者が授業に意欲的に参加したことによって、普段の授業の様子が伝わった。また、実際に生徒として模擬授業に参加することによって、参加者がデジタルコンテンツを活用した授業について理解しやすかったと考えられる。



「デジタルコンテンツ」という用語自体を初めて聞く人やどのように授業で活用していいのか分からないといった人に、実際に生徒になって授業の雰囲気を感じ取ってもらうことができた。更に、4つのブースに分かれての模擬授業により、低学年・中学年・高学年・さらに中学校と様々な学年の活用方法を体験することができ、コンテンツを活用した授業のイメージをつかむことができたと考えている。

改善点としては、模擬授業を見るだけでなく、さらに児童・生徒にとってより分かるように授業内容や方法について、参加者と議論し、一緒に深めていくことが必要だと考えている。(宇田)

#### 3.2. 普及啓蒙書の制作

##### ①活動のねらいと具体化「啓蒙書の制作」へ

平成15年7月の有田・日高ブロックのミーティングで、これまで蓄積してきたリソースやノウハウを生かして、どのように活動・研究を進めるかを話し合った結果、活動のねらいがはっきりしてきた。それは、

- ITを活用した効果的な授業の研究開発
- 実践者の実践力の向上
- 大学の地域への貢献
- オンラインのコラボレーションのあり方の研究
- ITを活用した優れた授業が普及するように啓蒙

等で、これらの要素を含んだ具体的な活動として、次の図1に示す「啓蒙書」づくりの案がでてきた。

さらに、初期のミーティングを通して、次のような具体化のポイントもはっきりし、内容が固まってきた。

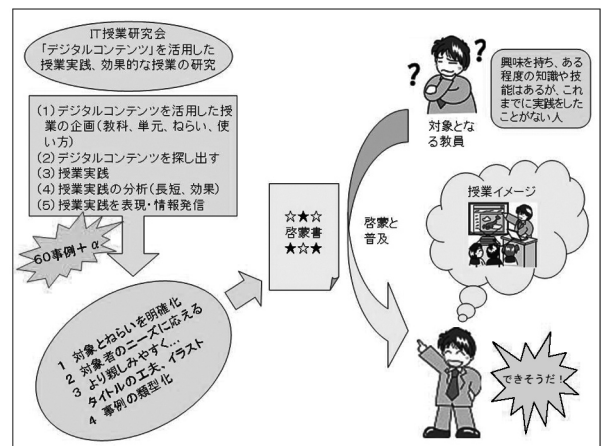


図1 啓蒙書づくりの案

##### ○対象とねらいを明確化する

まったくの初心者ではなく、興味を持ちある程度の知識や技能はあるが、これまでに実践をしたことがない人にしぼる。

## ○対象者のニーズに応える内容にする

ちょっとしたITの活用でも効果をあげられる方法を紹介したり、いざ授業をしようとしたときに困ったり悩んだりする場面を想定して、疑問に応えられるようにする。

## ○読み手にとってより親しみやすくする

タイトルの表現を工夫したり、授業の流れをイラスト化したり、楽しめる4コマ漫画を入れたりして難しそうというイメージを払拭し、楽しくわかりやすいものにする。

## ②啓蒙書づくりー啓蒙書の構成と原稿の執筆ー

オンラインの作業は、これまでの成果を生かしながら役割を分担し、図2のようなしくみを使って進めた。

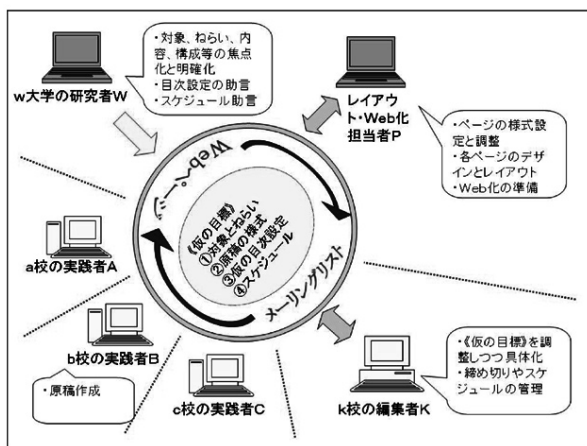


図2 オンラインの協働のしくみと役割分担

一番中心になる「対象者のニーズに応える」部分は、次のようにタイトルの付け方も工夫しながら「やればできるよIT活用」という章にまとめることになった。

## 《やればできるよIT活用》

- ワンポイント利用で効果絶大
- 機器も楽々セッティング
- コンテンツ探しの達人になろう
- あなたは素材の調理人
- 自分でコンテンツを作っちゃおう
- もっと使いやすい環境に
- 授業に使えるすぐれものサイト

また、実践事例については「使える授業アイデア30選」という章にして、読み手が使いやすいように類型化することにした。

このようにして作業は順調に進み、10月の半ばには原稿案がほぼ出揃った。

## ③啓蒙書づくりーイラスト化の作業ー

難しそうだというイメージを払拭し、楽しくわかりやすいものにするために、授業の流れをイラスト化したり、楽しめる4コマ漫画を入れたりする工夫を試みた。この部分はイラスト化担当者Pが担当し、図3のようなイメージになった。

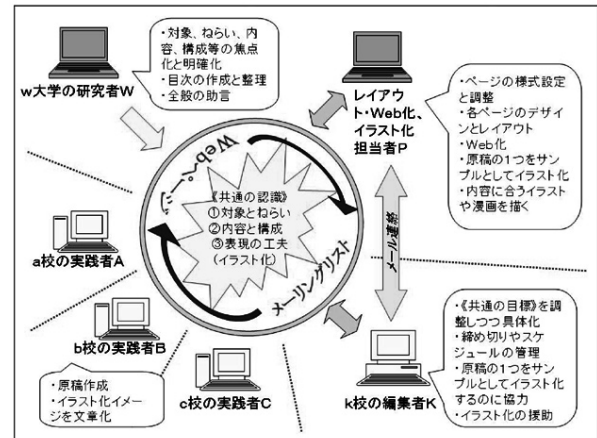


図3 イラスト化の流れ

イラスト化は元々の原稿の意図を損なうことなく、表現することが重要である。しかし、担当者Pは教育現場で直接授業に携わっていないことから、この間の相互理解は相当な困難を伴うものであった。また、地理的な要因もあり、作業の大部分はメーリングリストやメールを介してオンラインで行わざるを得なかった。たとえば4コマ漫画を例にとってみると、原稿執筆者がイメージを担当者Pにメールで伝えてイラスト化してもらった等の方法をとった。

イラスト化については担当者にとって相当大きな負担となったが、概ね次のようなやりとりで作業を進め、どうにか前進させることができた。

- イラスト化担当者から原稿作成者へのイラストについてのメールでの質問
- 原稿作成者からイラスト化担当者へのイラストイメージの説明
- 説明を受けてのイラストの挿入と修正
- 修正したイラスト入り修正原稿をWeb化
- 本文とイラストに関して校正者からイラスト化担当者への修正注文
- 修正注文を受けて本文・イラストを修正
- 修正したイラスト入りのページをWeb化

途中からは、図4に示すようにイラスト化の補助者Qも入れて作業を分担し負担を減らすとともに、編集者Kを含めたミーティングの機会を作ってイラストの

修正作業を一気に進めた。

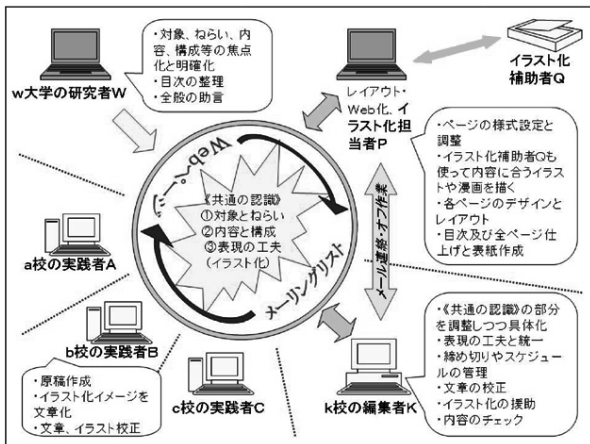


図4 イラスト化の流れを改善

#### ④啓蒙書の完成

イラスト化の作業は時間がかかりなかなか終わらなかったもので、その作業と並行して11月の初旬からは文章の校正作業に入った。誤字脱字のチェック、表記の調整、内容面の整合性のチェック等を行しながら、担当者Pが中心となって詰めの作業を進めていった。その結果12月の半ばには、表紙も含めて啓蒙書が完成した。スタートした時には完成した啓蒙書のイメージを持っていなかったが、できあがった啓蒙書「やればできるよIT活用」は、内容も表現も満足のいくもので、私たちは作りあげることができたことに大きな喜びを感じ、自信を深めた。

#### ⑤啓蒙書づくりをふりかえって

啓蒙書づくりは、それぞれの原稿をパーツにして全体を統合していく作業である。メンバーのひとりひとりは自分の原稿を自分のやり方でまとめている。原稿のもとになった実践の多くはレポートとしての発表や口頭での発表、Web化等も経ており、すでにある程度の水準の校正はされている。しかし、1冊の本にまとめるとなると、やはり様式の統一や全体の構成、相互のつながり等も考えなければならない。

最初は自分たちの実践記録を集めてまとめるくらいの気持ちであったが、本の市販を目指すことになり、読み手を意識するようになった。読み手としてどのような人を想定するかを議論してはっきりさせ、対象をしばった。その過程を経て内容がだんだんはっきりしてきた。表現についても細かい解説の必要な部分と、そうでない部分がはっきりした。またその後、「疑問と不安に答えるQ&A」も挿入することになった。

多くの原稿をただひとつにしたというだけでなく、全体としてのストーリー性を持たせたり、読み手にうったえかけるように工夫したりした。読み手が楽しみ、読み手に伝わりやすい工夫をしようとイラスト表

現を多く使うことになった。ただし元の原稿の意図を損なわないような形でイラスト化することも重要であった。イラスト化と全体の構成作業は担当者Pが行ったが、教育現場で直接授業に携わっているわけでもなく、しかも地理的に離れた場所で仕事をしている。そのため共同作業をメーリングリストを介して行わざるをえず、この部分の相互理解や共同作業は困難を伴うものであったが、経験がない部分やイメージを描けない部分については、メールでの実践内容のやり取りやイメージネーション、労力で補ってくれた。

このようにいろいろな難しさがあったが、何とか乗り越えることができ、難しさを乗り越えることで、私たち自身の勉強にもなったのである。（井口）

### 3.3. モデル授業の公開と番組化

#### ー インフォ・フェアにおける取り組み ー

コンピュータが導入されて二年半の志賀小学校に、インフォ・フェアにおける教育企画の話が舞い込んできた。「わたしたちのITレポートしらべて、まとめて、発表しよう」という、子ども達がインフォフェアの企業展示を取材し、調べたことを10分程度のプレゼンにまとめ、大ホールで発表するという内容である。

この二年半、コンピュータを活用した教育実践の内容は、

- インターネットによる情報収集
- ハイパーキューブねっとJrを活用して
  - ・ワープロ
  - ・お絵かき
  - ・表計算
  - ・メール
  - ・掲示板
  - ・音楽作成
  - ・ホームページ作成

#### ○算数、社会、理科などの教科ソフトの活用

などである。子どもたちはコンピュータを活用することが好きで、どの子も生き生きと活動していたが、パワーポイントの利用はほとんどしていなかった。

また、総合的な学習の時間や教科教育において、以下のような「調べ・まとめ・発表する」活動を行ってきた。

- 修学旅行の見学先のことを調べ、テレビ番組にまとめ、全校に発信する。
- 福祉的な内容のことを調べ、体験し、テレビ番組にまとめ、全校に発信する。

しかし、短時間で調べ・まとめ・発表するような活動は行っていなかった。

以上のような現状から、インフォ・フェアの教育企画に参加するに当たって、事前に次のような取り組みをし、子どもたちのスキルアップを図ろうと考えた。



- パワーポイントによるプレゼンテーション作成と発表。
- デジタルビデオやデジタルスチルカメラを活用し、短時間で取材し、まとめ、発表する活動。

まず、デジタルスチルカメラ、デジタルビデオ、パワーポイントを利用して「学校紹介プレゼンテーション」を作成してみた。志賀小学校のことを、知らない人に分かるように知らせる、という主旨で取り組んだのであるが、やはり短時間で作成するとすると、なかなか難しい。取材し、内容を整理し、まとめ、追取材をし、さらにまとめなおし、プレゼンテーションを作成していく。やはり時間はどんどん過ぎ、4時間くらいかかってしまった。子どもたちにとって志賀小学校のことはよく知っていることなので、学校の特徴をよく調べ、まとめられていた。また、プレゼンテーションも思ったよりもスムーズに作成できていた。しかし、そのプレゼンテーションを見てみると、原稿を作って読むという形式をとってしまったため、かたい発表となってしまった。また、パワーポイントのスライドも文字が多すぎたり、見ている人を惹きつけるような工夫はできていなかったりした。

次に、大学から教員とサポーターの大学生5人に来ていただいて、プレゼン講習を行った。内容は、グループ紹介プレゼンテーション作成と発表である。まず、事前に用意されたプレゼンテーションを見た。子どもたちは、プレゼンテーションの簡潔さ、また、分かりやすさを感じ、さらに写真のサイズ変更やオートシェイプの使用、ワードアートの使用の仕方などを学んだ。その後、サポーターの大学生と一緒にグループ紹介プレゼンテーションを作成した。より年齢の近い大学生と一緒に活動する子どもたちは、どの子も生き生きと活動できていた。また、グループに一人ずつ大学生がついたことにより、行き届いたスキル指導も行えていた。各グループともに大胆なスライド構成ができ、前回とは一味も二味も違ったプレゼンテーションが行えた。また、原稿を書いて見ながら発表するのではなく、パワーポイントのスライドを見ながら発表していく、という瞬発力も身につけられた。この事前のプレゼン講習のおかげで、情報機器活用のスキルが随分アップしたように感じた。

インフォ・フェア当日。会場に入り、展示ブースや発表の場となる大ホール、活動の場となる部屋を見て回った。どの子も目を輝かせ、これから始める活動を楽しみにしていた。

まず、展示ブースを下見し、どの展示を取材の対象にするのかをしぼった。事前にある程度考えていた取材対象であったが、実際に見てみると実感がわき、どのような取材をしていけばよいかも考えられたようであった。

それから一次取材。デジタルビデオ、デジタルスチルカメラを携え、展示ブースに向かった。最初、子どもたちは少し緊張してなかなか取材を切り出せなかったりもしていたが、大学生のサポートなどもあり、徐々に慣れてきた。実際に、人に対して取材する活動はあまり行えていなかったのも心配もあったが、子どもたちは積極的に取り組むことができた。

取材内容を持ち帰り、プレゼンテーションを作成していく。写真を取り込んだり、説明を加えたり、スライドを作成していくのであるが、大学生にサポートしてもらいながら、自分たちの手でスライドを作成していった。



そして、二次取材。プレゼンテーションを作成してみても足りない内容を、さらに取材した。一次取材よりもスムーズに活動でき、自分たちでどんどん進めることができるようになってきていた。

そして、さらにスライドを作成し、発表の練習を行った。ここでは、コメンテータと大学教員から、さらにどのような工夫を加えたらよいのかについてアドバイスを受けた。

アドバイスを元にスライドを編集したり、構成しなおしたりして、いよいよ本番の発表である。大ホールでの発表はどの子も緊張するであろうと予想されたが、意外と緊張も少なく、プレゼンテーションできていた。原稿を見ながら発表する子も少なく、スライドを見ながら、発表することができていた。情報活用能力の中でも、特に瞬発力が付いたと感じた。また、湖面テータに御好評頂き、さらに子どもたちの自信にもつながったのではないかと考えている。

このインフォ・フェアに向けての一連の取り組みにより、子どもたちは情報を収集し、整理し、まとめ、発信するといった能力が随分高められたと感じている。一日という短い時間で全ての工程を行ってしまうということは、なかなか大変なことである。しかし、どの子も楽しく、積極的に取り組めたことは、情報活用能力育成において、こういった活動が大変有効であるということ、さらにサポーターの大学生がいることにより、より情報活用能力が高められるということを示している。



物語っていると考える。

情報をよりよく活用していく能力は、情報化社会が急速に発展していく現在、必要不可欠なものである。今回の企画のようなものが、これからさらに教育現場に取り入れられるとよいと思った。(中井)

#### 4. 取り組みの成果と課題

これらの取り組みは、すべて教育の情報化に関わる実践研究である。例えば研修会も、企画から関わり、役割を分担することで研修会の意味を考え、自分の役割を考えながら模擬授業や事例発表を行うという実践活動となる。同時に、こうした活動を通して、自らの実践を振り返る機会ともなる。

研究者も、プロジェクトの運営、普及啓蒙書籍の制作、研修会や教育イベントの企画実施等に関わりながら、教育現場での実践から学ぶと同時に、自らの実践として取り組み、活動を振り返ることによって学んでいくのである。

こうした活動を行う場を設定することがまず必要であろう。大学が実質的な地域貢献、地域連携を実現する努力をすることが出発点なのである。プロジェクト研究の受託による研究グループの組織化、私的な研究会、イベントへの協力、既存の研究会活動への支援など、連携の在り方は様々である。こうした機会を実践研究の場として捉え、現場の教員、教育委員会の指導主事、大学の研究者等が協働する場にすることができかどうか問われるのである。協働の場づくりによる地域貢献を通して、『教育の情報化』を推進する人材育成が実現すると考えられる。

それぞれが、こうした活動によって一人ひとりの実践研究の力量を高めていくことができたかどうかについては、評価が難しい。『教育の情報化』が普及したかどうかについても同様である。しかし、実施した研修会が一定の評価を得られたこと、IT授業研究会が松下教育財団の実践研究助成を獲得したことなど、研究集団としての力量は高まっていると考えられ、実践研究を推進できる人材が増えたことは間違いないだろう。

今年度は、地域貢献特別支援事業において、模擬授業を中心とした参加型研修会の充実と学校研究会等への出前研修に取り組むことにした。これは、地域における人材と共同研究が可能な学校の発掘を意図した取り組みである。

また、スクールボランティア活動と教員研修を融合させた取り組みもスタートした。教員養成の観点からも、学生がこうした活動に関わり、教育実践力や実践研究能力の育成につなげていくことが望ましい。

いずれにしても、人材の育成と普及啓蒙活動は、長期にわたって行う必要があり、地域の大学として継続して取り組んでいくことが重要であろう。(野中)

#### 参考文献

- Sirotnik (1993) 日本語版への序文、学校と大学のパートナーシップ—理論と実践、グッドラッド、シロトニック編、中留武昭監訳、玉川大学出版部、pp. 5-10
- 野嶋栄一郎 (2002) 教育実践を記述する、金子書房
- 野中陽一 (2002) テレビ会議システムを活用した情報教育研究プロジェクトの推進に関する研究、和歌山大学教育学部実践総合センター紀要、pp. 1-8
- 野中陽一 (2003) きのくにデジタルコンテンツ活用コンソーシアムの取り組み」の評価、和歌山大学教育実践総合センター紀要、No. 13, pp. 16
- きのくにデジタルコンテンツ活用コンソーシアム (2003) デジタルコンテンツの活用高度化事業研究成果報告書
- 山中昭岳、有田佳乃巳、野中陽一 (2003) 教科学習におけるデジタルコンテンツの活用事例の分析、日本教育工学会研究報告集、JET03-1, pp. 9-14
- 野中陽一、井口章、和歌山IT授業研究会 (2004) やればできるよIT活用、高陵社書店